平成２８年度霞ヶ浦学講座　第６講　結果報告

実施日時：平成 28 年 9 月 14 日（水）9:00－16:20

場所：稲敷市歴史民俗資料館、本新干拓地、稲波干拓地、大日苑

講師：千田沙織氏（稲敷市歴史民俗資料館）、野口幸徳氏（NPO 法人稲敷伝統文化保存会）

参加者数： 32 名

テーマ：「本新干拓地と稲波干拓地見学」バスツアー

概要：まず、**稲敷市歴史民俗資料館**では、学芸員の千田氏から稲敷市の歴史について、干拓に関する展示資料を中心に説明を受けました。縄文時代の福田貝塚や広畑貝塚出土の土器名品。室町時代から戦国時代にかけて土岐氏が江戸崎城を拠点にこの地方を支配したこと。その後芦名氏を経て、江戸時代には幕府の天領で、霞ヶ浦・利根川の水運で繁栄したことなどが興味深く語られました。

稲敷地方の干拓は戦前から始まりました。大杉神社と浮島の間にあった甘田入の干拓はまず地元の有力者であった竿代文蔵が私財を投じて開始したのですが、泥深い湿地のため工事は困難を極めました。その後、群馬県出身の資産家植竹庄兵衛が引き継ぎ、干拓に成功しました。その実績を買われ、植竹庄兵衛は榎浦（えのうら、えのきうら）とも呼ばれた江戸崎入の干拓に取り組みました（後述）。一方、江戸時代から箕和田浦と呼ばれた広く浅い水域では、戦後、国や県の助成により本格的に干拓が開始されました。安定した稲作が可能な農地造成を目指して、広い**本新干拓地**(572ha)が完工し、山形県、山梨県、千葉県、地元茨城県からの入植者を、営農顧問上野満氏が使命感を持って熱心に指導しました。酪農など特色ある経営も導入され、土地改良が進み、現在では大型農機が入る広大な美田に変貌をとげました。

参加者は千田学芸員の説明に聴き入り、困難な干拓事業に取り組んだ先人達の労苦に思いを馳せていました。また特別展では稲敷出身の第七代横綱稲妻雷五郎に関する資料や昭和初期の浮島周辺を描いた版画家川瀬巴水の作品なども鑑賞することができました。また前庭では、干拓や土地改良事業に活躍した大型ディーゼルエンジン、揚水ポンプの実物展示を見学しました。

昼食後、参加者はバスで本新干拓地の中央道路をめぐり、車窓から日本有数の早場米地帯でもある広大な水田、酪農農家が並ぶ地区も見学しました。さらに浮島、馬渡、古渡、神宮寺を経て旧江戸崎町の市街に入り、**稲波干拓地**を見下ろす台地上の**大日苑**を見学しました。大日苑は、戦前に甘田入干拓、稲波干拓に取り組んだ功労者植竹庄兵衛の旧邸で、国登録有形文化財に指定されており、建築史的にも興味深いアール・デコ調の和洋折衷様式の建物です。現在、ここを拠点に地域振興に積極的に取り組んでいる NPO 法人の野口副会長から、稲波干拓事業の歴史、大日苑の建築の特徴や内装、さらに現代における映画ロケ受入、雛祭り、講演会開催など地域振興をめざす活発な活動について説明をうけました。建物内には、干拓工事の模様を描いた絵画が掲示されていました。その絵には戦前小野川に架けた仮橋に設置したトロッコで、対岸の丘陵地を崩した土砂を運搬し、締め切り堤防を築いた様子がリアルに描かれていました。しかし、小野川河口の榎浦湖底の軟弱地盤のため沈下が著しく、相当の難工事になり、巨額の工事費を費やしたこと、水戸刑務所の模範囚が作業に動員されたことなどが野口氏から丁寧に語られました。このような難事業の末に完成された 235ha の江戸崎入干拓地には富山県の栃波などから入植者があり、現在は黄金の稲穂が波打つ稲波干拓地と呼ばれ、冬期には関東地方唯一のオオヒシクイ越冬地となっています。